

## 14 慧日寺（えにちじ）

平安時代に徳一によって開かれたお寺です。

平安時代の初め、名峰磐梯山を望む山麓に、南都法相宗の学僧徳一によって開かれた慧日寺。最澄との「三権実論争」（ツバゲツツ）を通じて、全国にその名をとどろかせました。

平安時代を通じて興隆を極め、その反映の姿は江戸時代後期に編さんされた『新編会津風土記』に「・・徳一当寺に住せしより以来相続て寺門益繁栄し、子院も三千八百坊に及び、数里の間は堂塔軒を比し、薨を並べ壯麗言計なりしとぞ。されば会津四郡の地大方は寺領なりしに・・・」とも伝えられました。

源平争乱に巻き込まれ、一時寺は疲弊しますが、中世には加藍の復興が進み、「絹本着色恵日寺絵図」（景重文）に見るように、門前には一大寺院都市が形成されました。



文章出典：「国指定史跡 慧日寺跡」パンフレット  
磐梯町教育委員会文化財保護室  
写真提供：磐梯町教育委員会文化財保護室

## 10 旧高松宮翁島別邸（福島県迎賓館）

大正11年に有栖川宮威仁親王妃尉子殿下の御保養のために高松宮宣仁親王殿下が建設されたご別邸です。

大正天皇第三皇子・高松美也宣貴仁親王殿下が、喜久子妃殿下の母方祖母に当たる有栖川宮威仁親王妃尉子殿下の御保養のために、大正11年に建設されたものである。

当時、既に有栖川宮別邸としてルネッサンス様式をとり入れた洋風建築・天鏡閣（明治41年建設）があったものの、高松宮宣仁親王殿下は御還暦前の尉子妃殿下を気遣われ、御用地内で猪苗代湖を南東面にひらき、磐梯山を北面に望む天鏡閣の南東位300mの一段低い景勝の地を御選定され、自然石を基礎とし自然の景観を庭園に見立てた純日本風のたたずまいを有する別邸を1年余の歳月をかけて完成させた。



文章出典：「旧高松宮翁島別邸（福島県迎賓館）福島県」パンフレット

## 6 戸ノ口原古戦場跡

戊辰戦争における戦場跡です。「白虎隊奮戦の地」の碑と供養塔が建っています。

慶応4年（1868）8月22日、母成峠の藩境を突破した西軍が、怒濤のごとく猪苗代湖畔の要衝「戸ノ口十六橋」を目指して殺到し占拠した。また、一隊は湖を渡り笹山への襲撃に成功し、この両面作戦で挟み撃ちを受けた会津藩守備隊は、苦戦を強いられた。

急遽、松平容保公警護の白虎隊士中二番隊37名が滝沢本陣より派遣された。総員107名の会津軍に対し、数倍の兵力と優れた性能の武器を持つ西軍では勝敗は目に見えていた。戸ノ口原で展開された戦闘では、孤立無援となり、その任に散り果てた藩士も多く、白虎隊20余名は、藩主に復命するため後退し、弁天洞穴をくぐり飯盛山へたどりつくのであった。



文章出典：「平成19年度歴史案内人養成講座」テキスト  
旧滝沢街道ふれあいまつり実行委員会

## 4 強清水（こわしみず）

「ふくしまの水三十選」（福島県選定）の名水の場所です。この水を使った蕎麦も有名です。いくつかの伝説が残っています。二本松街道と白河街道の分岐点に位置し、数軒の蕎麦屋もあります。

強清水は東西二つの集落に分かれ、東は上村で旧道の南側に、西は下村で旧道の両側に民家が並んでいる。強清水は荒井新四郎が万治二年（1659）に赤井川より水を引いて堰を築き、次いで寛文二年（1662）当時八田野村・金堀村・赤井村の境界付近一帯の原野を開いて、一村を構えたのが始まりである。

下村に強清水という夏でも冷たい清泉が湧いているところから村名ができた。戊辰戦争では清水の前の茶屋一軒に民家二軒を残して他は全て兵火を受けた。



文章出典：「歴史の道」二本松街道（会津街道）本宮一若松」福島県教育委員会

## 15 16 東京電力／水力発電所群

米国での「10万ボルト長距離送電成功」により計画は一気に加速し、明治44年、猪苗代水力電気株式会社設立され、翌明治45年「猪苗代第一発電所」の建設に着工。（当時は我が国に発電所建設の技術がないため、建物以外は全て外国産に頼ったもの。）

大正3年10月、猪苗代第一発電所完成。出力3万7千5百kW、東洋一の発電所として脚光を浴びた。

この電力は、同時に運開した「猪苗代幹線」を経て、東京までの225kmを11万5千ボルトでの送電に成功。これにより、東京田端変電所を経由し東京王子の電車を動かすなど、東京発展の礎となった。

発電所建物は、東京駅設計者の辰野金吾氏の設計指導で、東京駅と同じ赤レンガを使用。（レンガは、埼玉県深谷市、日本レンガ社・上敷免製。）大正7年6月には電力需要と相まって、純国産の猪苗代第二発電所が完成し運転開始。（出力2万4千kW）



文章出典：「自然豊かな会津」パンフレット  
東京電力猪苗代電力所  
写真提供：「電気のふるさと」パンフレット  
東京電力猪苗代電力所

## 12 野口英世記念館

国道49号沿いに位置する野口英世の記念館です。

野口英世博士は、明治9年11月9日に、猪苗代町三城湯に生まれ、その生家は数多くの遺品とともに、ここ野口英世記念館に大切に保存されています。

生家には、博士が幼児期に火傷を負った囲炉裏や、医師をめざして上京する際に「志を得ざれば再びこの地を踏まず」と決意の言葉を刻んだ床柱などが当時のまま残されています。

博士は、明治33年に単独で渡米し、幾多の困難を乗り越えて細菌、病原菌研究の業績を重ね、ノーベル賞の候補にも名を連ねましたが、昭和3年ガーナ国アクラでの黄熱病菌の研究中に自ら感染し、この世を去りました。その生涯を象徴するかのように、ニューヨーク市にある博士の墓碑銘には「人類のために生き、人類のために死す」と刻まれています。

平成20年には「野口英世アフリカ賞」が創設されるなど、その精神と業績に対する評価は現在でも薄らぐことはありません。



## 9 天鏡閣

明治末期に建てられた鹿鳴館風の洋館です。家具インテリアも復元し、気品の漂う豪華な内部が見学できます。国指定重要文化財となっています。

明治40年8月、有栖川宮威仁親王殿下（ありすがわのみやたけひとしんのうでんか）が東北地方を御旅行中、猪苗代湖畔を巡遊され、その風光の美しさを賞せられてこの地に御別邸を建設することを決定されました。

明治41年8月竣工。翌9月、皇太子嘉仁親王殿下（大正天皇）の行啓が有り、同御別邸を「天鏡閣」と命名されました。これは李白（りはく）の句「明湖落天鏡」に由来しています。



文章出典：財団法人福島県観光開発公社HP

## 5 赤井谷地

赤井谷地沼野植物群落は、国指定天然記念物になっています。

面積45ヘクタールの湿原は豊富な水ゴケからなり、それらが作り出した泥炭層は3～5メートルに堆積して生成年数は1万年と言われている。約200余種の高山植物が群生しレンゲツツジなど10数種の低木類が点在している。体長1センチ程度のハッチョウトンボなどの昆虫も棲息し学術的にも貴重な湿原である。

今上陛下は昭和36年9月に当所を研究調査され翌年の新年御歌会に「雨はれし 水苔原に 枯れのこる ホロムイイチゴ 見たるよろこび」とお詠みになられた。付近の高台に歌碑が建っている。

更に昭和59年9月再度探勝なされた。亜寒帯植物の成育する高湿原の貴重価値に依り昭和3年国の天然記念物に指定された。



文章出典：猪苗代市役所HP